

日蓮教学における善と悪

原 慎 定

一 はじめに

「仏教と倫理」というテーマから日蓮の教学にアプローチしようとするとき、まず確認しなければならないことは、日蓮は善悪・正邪の判断の規準を法華經の教えそのものに求められていることである。日蓮は法華經を「明鏡」と称し、人間のあらゆる行為ならびに人間存在そのもの、さらには社会国土のあり方に至るまで、すべてをこの明鏡によつて照射しようとした。それぞれの存在は、明鏡に映し出されることによつて、三世を貫く永遠のいのちの中で本来の姿を取り戻し、あるべき道を見出すことができる。こうした意味で日蓮は、法華經を絶対的な規範として位置づけ、人類が生きる上での根本のよりどころとして提唱したものと考えられる。

日蓮はあらゆる人々にとつて、法華經が普遍的な倫理規範となることを実証するために、自らの生命を法華經に捧げることを決意した。「法華經の行者」としての日蓮の弘経活動

は、他宗の教義に対する批判を伴うものであるが、法華經には、釈尊滅後の弘通者は必ず法難・迫害に直面しなければならないことが仏の未來記として説かれている。日蓮はこの未來記を末法の社会で検証するために、あえて法難に値うことを自己の使命とし、法難の起こる現実社会こそが、法華經の教えが活現する場であるという、きわめてダイナミックな受けとめ方をしている。

したがって日蓮の他宗批判は、けつして単なる自己主張や排他主義ではなく、あくまでも規範としての法華經に対する絶対随順の「信」、すなわち徹底した自己否定にもとづく宗教実践であつたといわなければならない。末法という時代には、正しい倫理規範が見失われ、自己中心的で邪悪な考えがはびこり、悪知識の教えに惑わされてしまう人々が増大する。その中で日蓮は、他宗批判という形で邪悪な教えと対峙し、普遍的な倫理規範を立てることを自己の宗教的使命としたわけである。

このように、日蓮は法華経を「善」なる規範としていたと考えられるが、それと対立する「悪」なる存在については、どのような見解に立っていたのであろうか。「善」と「悪」の対立は人間社会において普遍的な図式であり、両者の相互関係を追究することは、宗教の根本課題であらう。本稿ではこのような問題意識に立って、あらためて日蓮の教学における「善悪」の關係論を追究しようとするものである。

二 善悪の關係論——対立概念と善悪相資説——

山本七平氏¹⁾の所論によれば、ヨーロッパ人は「善悪」を一つの対立概念で捉えるのに対し、日本人は善玉と悪玉に二分してしまふ二元論であるという。ヨーロッパの神学においては、神の存在も善悪という一つの対立概念で捉えなければ「生ける神」として把握できないが、日本人の善悪の判断基準は、自然法を第一の前提とする伝統があり、自然法に従っている限りは善であつて、「はからい」や欲があると自然法から外れるので悪とみなされるという。

日蓮は「法華経の行者」としての実践によつて、自己に敵対してくる存在を「謗法」と規定して批判を加えたため、その主張のあり方は、人間を善玉と悪玉に峻別しているように見受けられるかもしれない。ところが日蓮の場合は、あくまでも法華経を絶対的な規範とする点において、山本氏のいう

日本人的な善悪の判断基準とは次元を異にしている。むしろ日蓮は「善悪」を一つの対立概念で捉えていたのではないかと推測される。

そこで次に仏教における善と悪の關係論をみると、田村芳朗氏²⁾によれば、善悪二元論に対して善悪一元論が提起され、その両者を止揚するものとして善悪不二論が主張されるに至つたという。善悪不二論とは、善と悪とが敵対しつつ、統一されているということで、その特徴的な所論が天台智顛による善悪相資説であると指摘されている。

天台の善悪相資説とは、『法華玄義』巻五に「ただ悪の性は相は即ち善の性相なり、悪によつて善あり、悪を離れて善なし、諸悪を翻ずれば即ち善の資成なり³⁾」と説かれるように、善と悪とは互いに助け合いながら存在すること、すなわち善に即して悪あり、悪なければ善もまたないことをいつたものである。かかる善悪相資説は「相對種」と呼ばれ、安藤俊雄氏⁴⁾によれば、相對種は天台智顛の実相論における最も優れた特色で、「敵対的相即の弁証法」として高く評価される。すなわち敵対的相即の思想は円融論理の最高極処であり、天台智顛が法華経の中からこれを読み取つたことは特筆大書すべきであると論じられるのである。

三 日蓮遺文にみる善と悪

前項で一瞥したように、「善悪」の関係論としては、ヨーロッパの神学では対立概念という捉え方があり、仏教においても善悪不二論、善悪相資説などがある。こうした論理を手がかりとして、日蓮遺文にみられる善悪の関係を論理化していきたい。

まず日蓮のいう「善」と「悪」には、世俗的立場の善悪と宗教的立場の善悪とがあるが、

世間ノ善悪ハ在_レ眼前ニ愚人モ可_レ弁_レ之ヲ。於_ニ佛法ノ邪正・師ノ善悪ニ者、証果ノ聖人ニ_テ尚_レ不知_レ之ヲ。況_ニ於_ニ末代ノ凡夫ニ乎。

『守護国家論』定遺八九頁

と説かれるように、世俗の価値観による善悪は誰にでも判断ができるが、仏法における善悪を見きわめることは困難であり、そこに大きな問題があると日蓮は指摘する。このことについて『南条兵衛七郎殿御書』には、

末法になり候へば五濁さかりにすぎ、（中略）わずかの邪法の一をつたへて無量の正法をやぶり、世間の罪にて悪道におつるものよりも、仏法を以て悪道に墮_ルもの多_シとみへんべり。しかるに当世は正像二千年すぎて末法に入て二百余年、見濁さかりにして、悪よりも善根にて多_ク悪道に墮_ルべき時刻也。悪は愚痴の人も悪とすればしたがわぬへんもあり。火を水を用てけすがごとし。善は但

善と思_フほどに、小善に付て大悪のをこる事をしらず。

（中略）善なれども大善をやぶる小善は悪道に墮_ルなるべし。

（定遺三三二〜三三頁）

と論じられる。ここでは「世間の罪」とは次元を異にした仏法における罪が問題とされており、たしかに仏法であれば何らかの意味ですべて「善」ではあるが、日蓮はその中に「小善」と「大善」があるという。この場合の「小善」とは、自己を判断の規準において釈尊の教えを選ぶことであり、「大善」とは釈尊の本意に随順することを意味している。すなわち自分では「但だ善と思_フ」ついても、釈尊の本意を無視した恣意的な仏教受容では「大善をやぶる」こととなり、かえって「大悪」に陥るといふ論理である。

これと同様の説示は他の遺文にもみられ、『下山御消息』には、

世間に智者と仰_ルる人々、我もく時機を知れりくと存ぜられげに候へども、小善を持って大善を打ち奉り、権経を以て実経を失ふとがは、小善選て大悪となる、菓_シて毒となる、親族選て怨敵と成_ルが如し。

（定遺一三三〜三三頁）

と論じられる。また『千日尼御前御返事』には、

今日本国の女人は必ず法華経にて仏になるべきを、たばらかして一向に南無阿弥陀仏になしぬ。悪ならざればすかさねぬ。仏になる種ならざれば仏にはならず。弥陀念仏の小善をもつて法華経の

大善を失⁷。小善の念仏は大悪の五逆罪にすぎたり。

(定遺一五四三頁)

と述べられる。これらはいずれも浄土教批判の文面にみられる説示であり、日蓮は人間の「機」を中心とした仏教受容に立つ浄土宗に対して、人間の側の価値判断で積尊の「教」を選ぶことは、「小善」をもって「大善」を破ることになり、それは積尊の本意に背いた「大悪」になると論じている。仏法における価値判断の規準は、人間の側ではなく積尊の側にあり、あくまでも積尊の本意が示された「教」に随順すべきであるというのが日蓮の一貫した主張である。

このように日蓮のいう「大悪」とは、積尊の本意に背くという宗教的次元の罪を意味しており、「大悪」はそのままではけつして悪として自覚化されないところに大きな特徴がある。自己の犯した「大悪」を自覚することができるのは、積尊の本意である「大善」に触れた時に限られるからである。

日蓮自身も「大善」としての法華経を行ずることによって、自己の曠劫の過去からの「謗法」の罪を知ることができたと語っており、日蓮において他者の「大悪」を責めることと、自己の根底に潜む「大悪」を自覚することとは不断の相互関係にあつたといえる。つまり「大善」と「大悪」は常に同時的な関係にあり、その意味で両者は一つの対立概念とみなされてきたと考えられるのである。

日蓮教学における善と悪(原)

これらの論点を集約する叙述が次の『智慧亡国御書』にみられる。

今末代悪世に世間の悪より出世の法門につきて大悪出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をす(修)、れば、いよく代のはるぶる事出来せり。今の代の天台真言宗等の諸宗の僧等をやしなうは、外は善根とこそ見ゆれども、内は十悪五逆にもすぎたる大悪なり。しかれば代のをさまらん事は、大覚世尊の智慧、ことくなる智人世に有りて、仙予国王のごとくなる賢王とよりあひて、一向に善根をとどめ、大悪をもて八宗の智人とをもうものを、或はせめ、或はながし、或はせ(施)をとどめ、或は頭をはねてこそ、代はずこしをさまるべきにて候へ。法華経の第一の巻の諸法実相乃至唯仏与仏乃能究尽ととかれて候はこれなり。本末究竟と申⁸は、本⁹者悪のね(根)善の根、末と申⁸は悪のをわり善の終⁹ぞかし。善悪の根本枝葉をさとり極めたるを仏とは申⁸なり。

(定遺一一二九〇三〇頁)

ここでは当時の諸宗の僧侶が自己の判断によつて修する「善根」が実は「大悪」に陥つてしていると指摘し、その「大悪」に対する批判を徹底すべきことが主張される。ついで法華経の諸法実相の教理は「善」と「悪」を究極的に一つの対立概念で捉えるところに特質があり、それをさとするのが仏の境界であると説かれている。つまり日蓮は、法華経を絶対的な規範とするとき、潜在的な「悪」を顕在化させることが「善」の発場になるといふ、きわめて逆説的な論理にもとづいて「大

悪」を責めていたことになるわけである。⁶⁾

法華經における善惡の対立概念については、さらに『富木入道殿御返事』の説示が注目される。

善と悪とは無始よりの左右の法也。權教並諸宗の心は善惡は等覺に限る。若し爾者等覺までは互に失有べし。法華宗の心は一念三千、性惡性善、妙覺の位に猶備れり。元品法性は梵天・帝釈等と顯れ、元品の無明は第六天の魔王と顯したり。(定遺一五二〇頁)すなわち「善」と「惡」とは、「無始」という永遠性をもつ対立概念であり、両者は根本的な相互關係をもつことによつて、法華經の「一念三千」の教理の中に円融して収められているというのである。

以上のように、日蓮は絶対規範としての法華經の「大善」と、それに背く「大惡」とを永遠の対立概念として捉え、両者を統一するところに法華經の特質があると論じている。

「法華經の行者」としての日蓮の宗教実践は、法華經を絶対規範(明鏡)として現実社会を照射するものであり、社会の実態をあえて「大惡」と規定することによつて、その対極の「大善」を顕現しようとしたのではないかと考えられる。

このことは、「大惡をこれば大善きたる」(『大善大惡御書』定遺八七七頁)、「大惡は大善の来るべき端相なり」(『智慧亡国御書』定遺一一三二頁)という端的な表現をもって示されている。つまり日蓮は、「大惡」を顕わすことによつて対極の「大善」

をもたらずという、きわめてダイナミックな発想に立つていたことが理解できるのである。

四 むすびにかえて

以上考察したように、日蓮は法華經を絶対的な規範として立てることによつて、末法の社会に潜在する「惡」を顕在化し、それと同時に「善」を引き起こすことを目指していたと考えられる。このことは、原理的には、「善惡の対立概念」あるいは「善惡相資説」に通じるものであり、特に日蓮自身も触れているように天台の「一念三千」の円融論に立脚するものであった。日蓮はこうした論理を机上の觀念論にとどめるのではなく、実践倫理として社会に具現化することを求めていたのであり、それが「法華經の行者」の行動規範となっていたと考えられるのである。

日蓮の「法華經の行者」としての行動は、他宗の教義の誤りを「大惡」と批判することによつて、法難を受けることが必然的課題であった。その法難は、法華經では積尊の未來記として予言的に説かれており、日蓮が「大惡」と対峙することとは、積尊の未來記を末法の社会において検証することであったといえる。『種種御振舞御書』には日蓮自身の受難体験を回顧して、それがさらに積尊との宗教的同時性の体験であったことについて次のように述べられている。

相模、守殿こそ善知識よ。平ノ左衛門こそ提婆達多よ。念仏者は瞿伽利尊者、持斎等は善星比丘。在世は今にあり、今は在世なり。法華經の肝心は諸法実相ととかれて本末究竟等とのべられて候は是也。(定遺九七一頁)

釈迦如来のためには提婆達多こそ第一の善知識なれ。今の世間を見るに、人をよくなす(成)ものはかたうど(方人)よりも強敵が人をばよくなしけるなり。(定遺九七二頁)

日蓮が仏にならん第一のかたうどは景信、法師には良観・道隆・道阿弥陀仏、平ノ左衛門ノ尉・守殿ましまさずんば、争か法華經の行者とはなるべきと悦。(定遺九七三頁)

すなわち日蓮に敵対した人物を具体的に挙げ、それらを積尊に敵対した存在と対比することによって、法華經弘通に伴う法難は積尊との同時性にもとづく宗教体験であったと論じられている。ここであらためて注目しなければならぬのは、積尊にとつても、また日蓮にとつても、法難の加害者の存在が不可欠の資助であったと表明されている点である。

つまり、歴史的現実の場面において法華經に背く「大悪」は、宗教的規範としての法華經の「大善」を引き出す上で不可欠の資助となる。こうした意味で法華經は「悪」を「善」に転化する論理をもち、日蓮はそこに法華經の救済性を見出していたものと考えられるのである。

1 山本七平著『比較文化論の試み』(講談社学術文庫、一九七六

日蓮教学における善と悪(原)

年)八七〇九二頁

2 田村芳朗稿「善悪一如」(仏教思想研究会編『仏教思想?・悪』第四章、平楽寺書店、一九七六年)一六五〇九頁

3 『大正藏經』三三卷七四三頁。(原漢文)

4 安藤俊雄著『天台性具思想論』(法蔵館、一九七三年)四五〇五四頁

5 『開目抄』定遺六〇二〇三頁。日蓮の罪業意識については、拙著『日蓮教学における罪の研究』(平楽寺書店、一九九九年)を参照されたい。

6 悪の顕在化が善の発場になるという逆説的な論理については、拙稿「日蓮教学における逆説の論理」(『印度学仏教学研究』四六卷一号)で論じたことがある。

(キーワード) 倫理規範、対立概念、善悪相資、日蓮の実践倫理

(立正大学専任講師)